



Title	不定形の都市パリ : "Babylon Revisited"における場所の二項対立
Author(s)	平井, 智子
Citation	Osaka Literary Review. 1994, 33, p. 113-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

不定形の都市パリ—“Babylon Revisited” における場所の二項対立

平井 智子

I

“Babylon Revisited”は、一人の男が、かつて追放されるように出て行かなくてはならなかった街、パリを再び訪れる物語である。主人公 Charlie は、20年代パリで馬鹿騒ぎをしていた他の多くのアメリカ人と同様に、急速にふくれあがったドルの力によって大きな富を築き、それにあかして華やかで放縱な生活を送っていた。やがて、例に漏れず恐慌による経済の崩壊のあおりをくらい、財産だけではなく家族も失い、プラハへと去っていく。数年後彼は妻の姉夫婦と暮らしている娘を引き取るためにパリを訪れ、義姉に現在の自分の生活の安定をアピールするが、妹の死をCharlieの責任と考える義姉の彼に対する悪感情は根深く、いくつかのすれ違いの結果、娘を引き取ることはかなわなくなる。

この失敗の前後の Charlie の不安定な心情は、Fitzgerald のあらゆる主人公に共通の、「かなえられない夢」から発する心理的葛藤である。これは、様々な批評において、アンビヴァレンスとしてとらえられ、二項対立の視点から解説されてきた。Fitzgerald 作品における代表的な二項対立を挙げるなら、*The Great Gatsby* における、富の追求と純愛、東部と中西部、*Tender Is the Night* の、昼と夜、そして、ほぼ全作品にあてはめることのできる、理想と現実、などがある。このような二項対立の論点は、Fitzgerald の批評において、すでに揺るぎない正当の位置をしめているといっても過言ではない。

本稿は、“Babylon Revisited”におけるこのような二項対立の設定に意

義を唱えるものではない。Charlie の不幸は、地道な生活を送る現在の彼と、遊蕩とアルコールに溺れるかつての彼の二者の葛藤であると断言しても差し支えない。ところが、この作品の二項対立を *The Great Gatsby* と平行して論じ、対立するふたつの要素の際だったコントラストを両者の共通点として指摘することは、妥当だとは思われない。たしかに、*The Great Gatsby* では、いくつもの二項対立が、登場人物たちに動機付けを行い、その激しいコントラストが全編を通じ彼らの心理や行動を客観化しており、衝突する動的な対立項をもつ作品だといえる。いっぽう “Babylon Revisited” で指摘される対をなす二項、例えば、現在の主人公と過去の主人公、あるいは、ヨーロッパとアメリカの文化は、はげしく対立するようなものではないと考えられる。両者は、*The Great Gatsby* 中の対立項に可能な、明確な区分を受け付けず、ぶつかりあうというよりもむしろ混在することによって、主人公のどのような方法をもってしても抜け出せない不幸を引き立てているのではないだろうか。本稿では、このような “Babylon Revisited” にみられる複雑な二項対立を、作品の舞台であるパリという場所の分析を通じて論考していく。

II

Roy R. Male は、この作品が、Odysseus の帰還や *Rip Van Winkle* と同様に、追放されたものがもとの場所に戻り、その変化を体験するとともに試練を受ける “Exile’s Return” の原型を持つことを指摘する。¹⁾ いうまでもなく、“Babylon Revisited” は、ひとつの場所をテーマに、ロストジェネレーションの作家が好んで描いた国籍離脱者 “expatriate” の生活の光と影を大恐慌前後のパリに映し出した作品であると考えられる。

タイトルから、大恐慌以前の華やかな退廃の都パリが、華美で種々の悪徳のはびこっていたバビロニアの首都になぞらえられていることがわかる。主人公が再び訪れるパリは、宴の後の、いわばバビロンの廃虚である。同じ場

所でありながら、大きな変化によって隔てられ、とくにその変化の影響を激しく受けた者の視点から描かれる、恐慌前のパリと恐慌後のパリは、比較対照の可能なふたつの場所として二項対立を形成する各項とみなされても不思議はないようである。John Kuehl はつぎのように述べている。

Besides enabling the Author to internalize the conflict between the two sides of the protagonal nature, third-person limited perspective enable him here, as in "The Ice Palace," to internalize opposing land scapes. This opposition, which previously focused on the geographical area (The North) versus another (the South), now focuses on Europe, the setting where Americans most often become emotional bankrupts. If the Charlie/ Charles dichotomy was objectified by irresponsible Lorrain and Duncan and responsible Marion and Lincoln, it is also dramatized through Paris before and after Crash.²⁾

Kuehl が、恐慌以前のパリ対恐慌後のパリに相当するものとしてあげている“*The Ice Palace*”の南部対北部の関係について考えてみる。南部生まれの娘が北部出身の婚約者の故郷で数日を過ごし、結局自分のアイデンティティーを南部に発見するというこの短編は、*The Great Gatsby* 以上に明確な地理的コントラストをもった作品である。南部の光、怠惰、優雅、北部の暗さ、勤勉、質素といった象徴は、あまりに一般的で陳腐でさえあるほどだが、それだけに把握しやすく、これらのイメージは作品全体に非常に堅固な骨組みを与えている。また、南部→北部→南部という主人公の物理的な移動は、即彼女の精神的な旅と重なり合い、いずれにしても“*The Ice Palace*”は場所の取り扱いが作品の統一感を支える典型的な作品といえる。

The Great Gatsby の場所の仕掛けは、“*The Ice Palace*”ほど単純ではないが、ふたつの場所の鮮明な対比関係が存在する。語り手 Nick Carraway の中西部→東部→中西部→東部という動きが、ストーリーの展開と無関係ではないように、マンハッタンとロングアイランド、イーストエッ

グとウエストエッグといった、対照的なふたつの場所の差異は、すなわち Gatsby の破滅へとつながっていく各所で登場人物の言動や心理のひずみの呈示に説得力を与えている。いくつもの二項対立が交錯するため、場所の構造は複雑であるが、それぞれの場所とそれが象徴するものの関係は極めて密である。例えば、Nick の郷里の保守的ではあるが穏やかな街は、安定と退屈、ひいては古きよきアメリカの象徴であり、Tom が愛人と公然と馬鹿騒ぎをし、Gatsby がうさんくさい仕事上の密談をするマンハッタンは、まぎれもなく騒然とした悪徳の都である。このように場所の個性は明確でとらえやすく、設定される対照関係がはっきりしている。このような明らかに作品の統一感に寄与する場所の二項対立が“Babylon Revisited”にも存在するのであろうか。

III

現在のパリ（恐慌後のパリ）対過去のパリ（恐慌前のパリ）を仮説として、作品の中の具体的な事例を検証していきたい。ストーリーは、Charlieがかつての放蕩の大舞台となった Ritz Bar を訪ねる場面から始まっている。

He was really disappointed to find Paris was so empty. But stillness in the Ritz Bar was strange and portentous. It was not an American bar any more— he felt polite in it, and not as if he owned it. It had gone back into France.³⁾

この箇所をみると、Kheul の指摘する現在のパリ（あるいはフランス）と過去のパリ（あるいはアメリカ）の激しい拮抗がこの場面の後に期待される。しかし、Charlie の目にうつる現在のパリだけを見ても、果たしてそれは対照をもち、その対照的な存在と鮮やかなコントラストを形成しえるような強烈な個性をもった場所であり得るのだろうか。この箇所から推察できる現在のパリのもっとも際だった特性は、静けさである。一見この特性は、過去のパリの騒然や混乱と好対照をなすものに思える。ところが、この静けさ

は、騒乱と相対する安定した静けさというよりも、むしろempty（虚ろな）、strange（なじめない）、portentous（不吉な）という言葉で表されるように、とらえがたく安定感の欠ける静けさである。

冒頭部にみられたような不安定な静けさの印象は、ストーリーの進行とともに次第に色濃くなっていく。

Outside, the fire-red, gas-blue, ghost-green signs shone smokily through the tranquil rain. It was late afternoon and the streets were in movement; the bistros gleamed. At the corner of the Boulevard des Capucines he took a taxi. The Place de la Concorde moved by in pink majesty; they crossed the logical Seine, and Charlie felt the sudden provincial quality of the left bank. (p. 216)

この箇所の視覚的イメージをおってみると、パリは細かな雨のフィルター越しにその光だけがぼんやりと浮かんだ都市である。その古い歴史も、生活の場としての人間くささも、そのフィルター越しには伝わらない。ここに描かれている都市がパリであることを認識させるもっとも大きな要素は、有名な通りや広場の名である。この箇所のみでなく全編を通じ描き出されるパリの姿は漠然としたもので、同時に、地名の他に店の名などの固有名詞が多用される。ぼんやりとした景色の中で突出したその具体性は、かえって白々しい印象を与え、現在のパリの空虚で無個性な静けさを強調している。

Kuehl が指摘しているように、また冒頭部の引用にみられたように、現在のパリ＝フランス的という個性を見出すことを期待しても不思議はない。しかし、このような密な図式は成立しうるのか。この作品の舞台がフランスであることをもっとも意識させるのは、前に述べたような固有名詞や、しばしばあらわれる必然性のないフランス語である。期待されるような、好景気の間の一時的なアメリカ的要素の侵攻に打ち勝った、長い歴史に支えられた退廃と洗練の都パリ、Henry James の伝統的な批評で指摘されてきたような大陸文化の象徴的存在としてのパリはどこにもみられない。

アメリカという異種の混入を退けて純血を回復するどころか、現在のパリは様々な異文化が混在する多国籍都市として描き出されている。義姉夫婦と初めての会見を終えた直後、Charlie は現在のパリの姿を過去とは異なる客観的な目でとらえようと (“He was curious to see Paris by night with clearer and more judicious eyes than those of other days.”) (218)、あてもなく街を歩く。ところが、彼の目に映る風景は憂鬱な殺伐としたものである。この情景の陰鬱さを強めているのはここに登場する人々で、パリに生活する人らしき姿もあるが、多くの黒人 (“many Negroes”) (219)、地方からきたフランス人の群 (“a local, colloquial French crowd”) (219)、観光バスの中から出て薄気味悪そうに Charlie をみるドイツ人や日本人、アメリカ人 (“the meagre contents of a tourist bus— a German, a Japanese, and an American couple who glanced at him with frightened eyes”) (219) など、大多数をなすのはパリの外から来た人々で構成されている。当初 Charlie がフランスのものに戻ったと感じたパリは、いわゆるパリのイメージとは微妙にずれた、境界の崩れた混沌の都市であることがわかる。この観光客の一団を目にした直後、Charlie は、放蕩 (“dissipate”) から作り出された現在の状況が虚無 (“nothing”) であると痛感する。Charlie の現在のパリは、アメリカ色の濃い20年代のパリと異なるのはもちろんであるが、それ以前のフランス的なパリと同一のものでもなく、断片化された把握不能の場所として表現されている。よって、フランス対アメリカという明確な対立関係は成り立ちがたいといえる。

またこの混沌こそがパリの個性であり、したがって “Babylon Revisited” に描かれるパリの姿は実際のパリを如実にとらえたものであるとする意見もあるかもしれない。J. Gerald Kennedy は、Fitzgerald がパリを舞台にした作品においては、パリの様相がそのまま作品に投影され、従来の境界が崩壊したモダニズムの特徴が強いことを指摘する。⁴⁾ これに対し、Jean Méral は、この作品に描かれるパリを「旅行者のパリ」と定義し、地に足のついていない者の目から描かれた非日常的で間接的な実体を感じさせないものと考

えている。⁵⁾ 両者の意見は対照的であるが、ともに、“Babylon Revisited”のパリに当てはまる見解である。モダニズムというパリの真髄は作品の中に取り込まれているが、場所としてのパリは、ある者が自己の存在の拠り所とする役割を欠いた形で描かれている。

IV

では、この作品を解釈する上で、場所はタイトルにおいては強調されているものの、主題とは関連性の少ないルーズな構造をもつ要素として、あまり考慮すべきものではないのであろうか。作品の内容に立ち戻って考察していく。

他の“Exile’s Return”の原型を持つ物語の主人公と同様に、Charlie もまた試練を受ける。ここでの試練は、文字どおり「試される」ことを示している。何について試されるかといえば、娘を引き取る資格であり、試験官は、義姉の Marion だといえる。彼女は、現在はまじめにみえる Charlie が、妹を死に追いやった（と彼女が考える）放蕩の悪癖をいまだに捨て切れていないのではないかと疑う。Charlie は彼女に、過去の自分と現在の自分が別物であることを示そうとする。彼は現在と過去の間には明確な区分をつけることを試されるのである。

Charlie の努力は、安定した場所の獲得に向けられていると考えられる。彼はMarionに、“I’m awfully anxious to have a home,... I’m awfully anxious to have Honoria in it.” (225) と訴える。Charlieは、フランスでもアメリカでもない新しい土地プラハで自分の根付く場所である家庭を獲得しようとするが、過去の場所パリに戻ってきたためにその計画が崩されてしまう。

Charlie の試練をパリという場所に結びつけて考えるなら、一言でいえば、彼は過去のパリと現在のパリをはっきり区別して認識することを迫られている、ということになる。ドルの力にあかした乱痴気騒ぎの舞台としてのパリ

は現在とは切り放された過去に属し、現在のパリはそれとは別物、アメリカ人のものではないフランスのものと理解されなければならない。Charlieの現在対過去の認識は、すなわち現在のパリ対過去のパリという明確な図式を設定する能力の有無にあらわれてくる。

冒頭のRitz barの場面で、一見 Charlie が現在のパリを過去のものとして切り放しえたように描かれているのは特徴的である。この設定はストーリーの進行にともなって微妙に歪んでいく。現にこの場面でもその不安定さが微妙に暗示されている。先に述べた “empty”、“strange” といった修飾語、「おかま」(“queens”) (215) という、境界の崩壊、類別の不能を象徴する人々が不吉な予兆のようにあらわれる。またなによりも、Maleが、“The harsh fact is that if he had not stopped in the Ritz Bar in the first place, had not tried to get in touch with Duncan Schaefer, he would have won back his daughter.”⁶⁾ と述べるように、過去を象徴する Ritz bar から物語が始まっていることは、運命の皮肉を大きく裏付けしている。

しかし、この皮肉は、作品の全体を見渡したあとで指摘できることで、ここでCharlieの場所の把握の不能が全面的に打ち出されているわけではない。Charlieは最初から過去に完全に征服されているのではなく、ここでの彼の意図は、過去の場所に真っ先に飛び込んでいくことで自らに試練を課そうとするものと解釈できる。彼は自分に言い聞かせるように、過去の Ritz bar の盛況と現在の静けさを対比させている。当初の主人公は、現在のパリについて認識することに意欲をもっている。Charlie の場所の認識の不能は、第三章に示したような無個性なとらえがたいパリの姿として次第に明らかになっていく。

現在のパリの曖昧で無個性な姿は、第三章に示した通りであるが、では、過去のパリはどのような都市なのであろうか。冒頭の Ritz bar の場面での、“It was not an American bar any more—” (214) という言葉が示すように、Charlie の認識における恐慌前のパリは、アメリカ人のパリである。ここでは、かつてのパリはドルの力によってあらゆる放蕩を可能にしてくれ

る華やかで魅力的な悪都、現在の静かなパリとは対照的なエネルギーに満ちた街のように思われる。それならば、無個性でとらえがたいのは現在のパリのみで、過去のパリは、個性あるとらえやすい場所なのであろうか。この期待もまたCharlieがパリを歩くにつれて裏切られていく。

Ritz bar を出て街を徘徊する Charlie はふとある安レストランを目にし、以前はそのような店で食事をした経験が一度もないことに気づき、“For some odd reason he wished that he had.” (216)、と感じる。“some odd reason” は文中では明らかにされないが、おそらく、以前の自分がパリにいながら全く根付いた生活をしなかったことへの後悔も含まれると考えられる。Charlie の過去の悪都パリの情景は、夜の場面や酒場などの内部の閉じられた空間に限られ、都市の全体像が認識できる昼間の屋外の様相を全く欠いている。Charlie の存在したのは広いパリに点在する酒場で、アルコールにより鈍ったかつての彼の認識力では、その点をつないでみても全体像は把握できない。“In the little hours of the night every move from place to place was an enormous human jump, and increases of paying for the privilege of slower and slower motion.”) (219)⁷⁾ Charlie が把握していたパリは、実際のパリの一部、あるいは彼が思いこんでいた非現実の姿にすぎず、狂った縮尺の上に富とアルコールで描き出された幻想であったことが次第に明らかになる。

Charlieは、過去の自分を現在の自分から引き離すために、新旧のパリの間には明確な境界をひこうと努めるが、彼の中での漠とした両者の分別不能は、次第に明らかになっていく。この場所の認識の不能は、Marion の課すテストでの不合格を暗示する。そして、“sudden ghosts out of the past” (222) である Duncan と Lorrain の登場により、ふたつのパリの混同の度合いはますます強まる。Charlie は冒頭の場面で Snowbird という Duncan の友人の居場所を尋ね、自分の連絡先を残している。Duncan 自身にはないが、過去の人物の行き先に示した興味は、悲劇的な結末につながっていく。この過去の場所に属すべき人物たちは、Charlieが Ritz bar に残した住所から

Marion の家をつきとめ、現在の Charlie の居場所を掌握することにより、現在と過去は完全に混じり会い、彼の失敗を決定的なものとする。

V

本論の冒頭で述べた現在のパリと過去のパリという二項の設定は可能であるといえる。しかし、この二項の関係は *The Great Gatsby* における終始鮮やかなコントラストを示しながら対立する二項の拮抗とは異なり、その不定形により融合していき、主人公の精神的混乱と不可避な運命を裏付けしている。

Mérel は、*Tender Is the Night* や “Babylon Revisited” に描かれる Fitzgerald のパリを、当時のパリの風俗を鮮烈に描ききったとする *The Sun Also Rises* などの Hemingway のパリと比較し、前者をアメリカ人の偏狭な視点から描かれた、臨場感や実体の欠ける「旅行者のパリ」と定義し批判している。⁸⁾ このような概念でみるならば、“Babylon Revisited” は、臨場感のある場所を描いた *The Great Gatsby* にはるかに劣る作品ということになるだろう。Charlie はたしかに金におごったアメリカ人の偏狭な視点から恐慌前のパリを見ていた「旅行者」といえる。そのため彼はその実体をつかみそこね、堅実な生活を始めようとする現在においてその誤った認識のつけを払うことになったのだ。“I spoiled this city for myself.” (216) という表現は、主人公の運命と場所の関わりを最もよく示している。結局「旅行者」でしかありえなかった、その場所を自分のものにできなかった者の目に映る街は、「旅行者のパリ」でしかありえない。主人公の視点から描かれるパリが現実のパリを鮮明にとらえた姿をしているならば、主人公の虚脱感や苦悩の必然性が欠けた作品となったであろう。

では、Kuehl の提案するような明確な二項対立を期待することは全くの錯誤であろうか。三人称ではあるが視点が主人公に限定されるこの作品においては、新旧ふたつのパリがあるという主人公の当初の錯覚は錯覚と意識さ

れず、明確な二項対立が設定されても不自然ではない。これは、ストーリーの進行とともに、実際に描かれている場所には当てはまらないことが明らかになっていくが、最初にそのような明確な二項対立を期待すれば、裏切られていく体験を主人公とともにすることが可能になる。

この作品は、*The Great Gatsby* に描かれたような場所の関係、新旧パリの明確な分別と対照を誘い出しながら、みずからそれを崩していくことによって、その空しさを証明していく。そのような二項対立は、作品の中で実体を持つものではなく、主人公の到達すべき条件として、結局その設定を否定されることにより、主人公の不運、幻想の崩壊を強調する。場所自体は曖昧に描かれているが、それゆえ場所の扱いとテーマの関連は緊密である。実際に、ふたつのパリは時間に隔てられた同一の場所であり、境界をこえて自由に行き来できる場所ではない。それができるのは人間の認識においてのみであるが、この作品で描かれるそれぞれのパリは、虚脱感に満ちた主人公の頭の中で明確な境界を欠いた状態で混在する、把握しがたい不定形の都市となっている。

注

- 1) Roy R. Male "Babylon Revisited: A study of Short Fiction," *Modern Critical Views: F. Scott Fitzgerald*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1985), pp. 89-96. 参照。
- 2) John Kuehl *F. Scott Fitzgerald: A Study of Short Fiction* (Boston: Twayne Publishers, 1991), p. 85.
- 3) F. Scott Fitzgerald "Babylon Revisited", first published in 1931, in *The Diamond as Big as Ritz* (London: Penguin Books, 1962), p. 214. 以下この作品からの引用はこの版により、ページ数のみを記す。
- 4) J. Gerald Kennedy *Imaging Paris: Exile, Writing, and American Identity* (Newhaven: Yale University Press, 1993) 参照。Kennedyは、*Tender Is the Night* をはじめ、Fitzgeraldの後期の小説における個人や性を囲む境界の崩壊を指摘し、モダニズムの特徴が顕著であると述べている。
- 5) Jean Meral *Paris in American Literature*, Laurette Long transl. (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1989) 参照。

- 6) Male, p. 194.
- 7) Kennedy は、Charlie がタクシーでセーヌ河の右岸と左岸をジグザグに進む行程に、地理的混乱を指摘する。Kennedy, p. 196. 参照。
- 8) Meral はフランス人の視点から、20、30年代のパリの歴史を検証し、そこにおける複数のアメリカ人作家を比較対照している。